

【資料紹介】

記念センター所蔵寄贈資料目録⑫

愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員 武井 義和

今回は 2017 年に愛知大学東亜同文書院大学記念センター（以下、「記念センター」と略記）に寄贈された資料の目録、および追登録した資料の目録を掲載する。

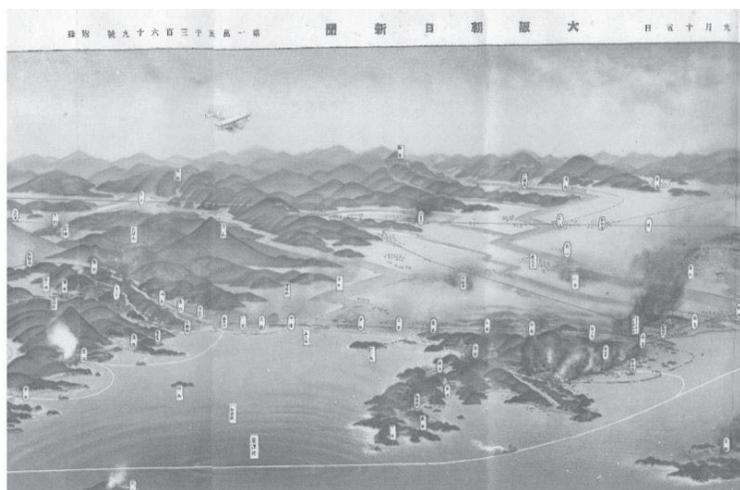
愛知大学同窓会岡山支部の**有森茂生氏**からは関東大震災全地域鳥瞰図絵 [No.36-117] を寄贈頂いた。これは大阪朝日新聞社が新聞付録として、関東大震災か

ら 1 年余りが経った 1924（大正 13）年 9 月 15 日に出したものである。表には関東地方南部から静岡県にかけての地域が鳥瞰図で描かれ、そのなかで東京や神奈川における関東大震災の被災地域が火災で示されている。この制作者は、大正から昭和にかけて日本各地の鳥瞰図を数多く制作した吉田初三郎（1884～1955 年）という絵師である（1）。

そして裏には「震災後の一年間」と題して東京や横浜、鎌倉や小田原といった各地の被害状況と復興の現状についてまとめられている。

この関東大震災全地域鳥瞰図絵をみると、被災地域がどのあたりで、どれほどの規模であったかということが視覚を通して理解できる。それとともに、船とその航路が白い線で描かれていることにも気付く。これは船による活動の様子を示していると思われる。

すなわち、関東大震災により京浜方面の交通や通信機関は一時途絶したため、日本郵船株式会社などの船舶会社は食糧の運送や罹災者の救護に当たった。特に、日本郵船株式会社は 3 つの上海



関東大震災全地域鳥瞰図絵 [No.36-117]
（二分割して掲載。上は右半分、下は左半分）

航路を休止して、その船を救護活動に転用する形で対応した。例えば、そのうちの一つ、長崎・上海間を結んでいた日華連絡線の長崎丸と上海丸は京浜・神戸間の連絡を担い、芝浦および横浜における乗船客を神戸まで運んでいる。1923年10月6日までの避難者の無賃輸送状況を見ると、長崎丸は9月9日より同月25日まで5回にわたり合計5,637名、上海丸は9月11日より同月26日まで同じく5回にわたり6,401名であった。長崎丸と上海丸は9月4日より11月6日まで救護活動に従事し、1923年11月18日に長崎・上海間の航路復旧にともない復帰した(2)。

関東大震災に際して以上のような活動を行った長崎丸と上海丸は、イギリスのデニー造船所で建造され、日本郵船株式会社が日華連絡線として就航させたものである(長崎丸は1923年2月、上海丸は3月に就航)。当初は長崎・上海間を航行していたが、1924(大正13)年5月に航路の起点を長崎から神戸に改めた。

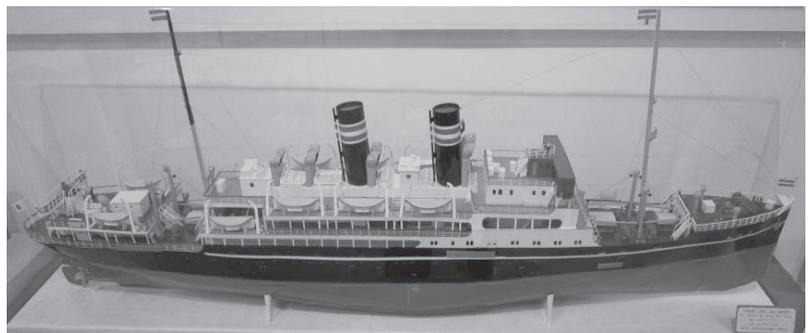
日中戦争勃発後の1939(昭和14)年8月、日中間および中国沿岸の航路を統制・強化する目的で、日本政府の要請により日本郵船株式会社や日清汽船株式会社など11社が参加して東亜海運株式会社が設立されると(1941年に民間会社から国策会社へ変更)、日本郵船株式会社は東亜海運株式会社への出資として、日華連絡線および上海丸と長崎丸などを譲渡した(3)。東亜海運株式会社への移籍後も両船は航行を続けたが、1942年に

長崎丸が長崎港外で機雷に接触して沈没し、翌1943年10月には上海丸が中国の揚子江口で衝突事故に遭い沈没した(4)。

ところで、上海丸は愛知大学のルーツに当たる東亜同文書院(大学)とも大きな関わりがある。なぜなら、戦前から敗戦時まで上海にあった日本の高等教育機関・東亜同文書院(大学)に合格した学生たちを、日本から上海まで運んだからである。上海丸で日本から渡航した学生たちの入学期と人数は、第25期114名(1925年入学)、第28期92名(1928年入学)、第31期73名(1931年入学)、第33期76名(1933年入学)、第42期172名(1941年予科入学)、第43期185名(1942年予科入学)であり、合計712名にもおよぶ(5)。

なお、**間野正己氏**(東京大学工学博士)により上海丸の精巧な模型が制作された。

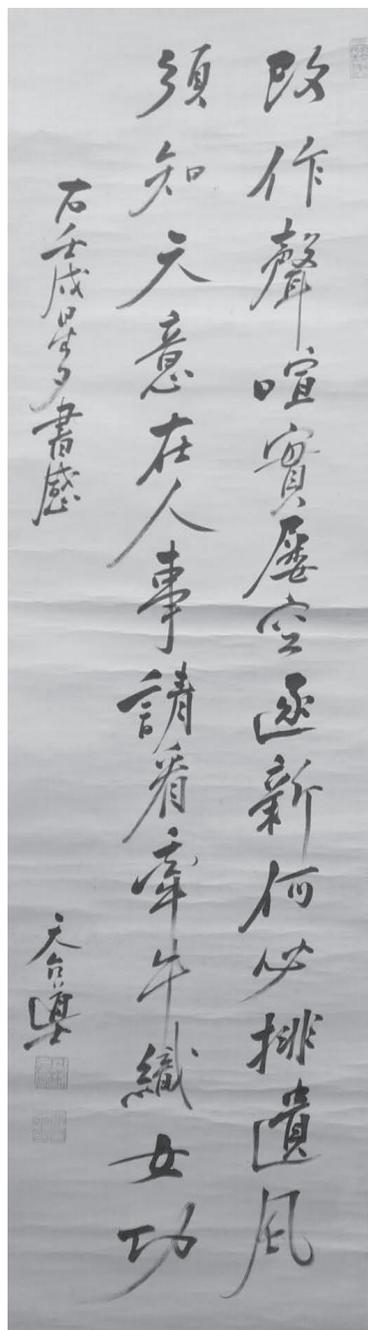
小川悟氏・高井和伸氏・有森茂生氏による「愛知大学同窓生有志の会」が**間野正己氏**に依頼して実現したものである。上海丸模型は120メートルの100分の1、120センチのサイズである。細部まで再現されており、当時の姿を知ることができる。この模型は「愛知大学同窓生有志の会」によって、2017年11月4日に愛知大学東亜同文書院



間野正己氏の制作による上海丸の模型

大学記念センターへ寄贈された。現在、記念センター展示室で見学することができる。

杉浦重剛書幅 [No.69-1] は**三好章東亜同文書院大学記念センター長**が入手し、2017年に記念センターへ寄贈されたものである。



杉浦重剛書幅 [No.69-1]

書には杉浦の号「天台道士」と記されている。また、「壬戌」とあることから1922年に記されたことが分かる。「改作声喧実屡空 逐新何必排遺風 須知天意在人事 請看牽牛織女功」(改作声喧しく実屡と空し 新を逐ふ 何ぞ必ずしも遺風を排せんや 須らく知るべし天意の人事に在るを 請ふ看よ牽牛織女の功)としたためられているが、当時の日本国内における「改作」すなわち「改造」の風潮に対し、みな「改造」とはしゃぎまわったが何も効果なく、知らず知らず旧慣を繰り返すに過ぎなかったという世相を詠んだ内容である(6)。

杉浦は裕仁皇太子および皇太子とご成婚された久邇宮良子女王の教育係として知られているが、東亜同文書院第2代院長を1902～1903年の1年間だけであるが務めた人物である。したがって、東亜同文書院院長経験者にゆかりのある人物ということができる。以前、**有森茂生氏**から杉浦に関する資料を複数寄贈頂いたが、今回また一つ関係資料が加わったことになる。

以下は以前に寄贈頂いた資料であるが、整理作業の過程でこのたび追加登録したものである。そのため、新たに寄贈頂いた資料とともに、目録にまとめて紹介する。

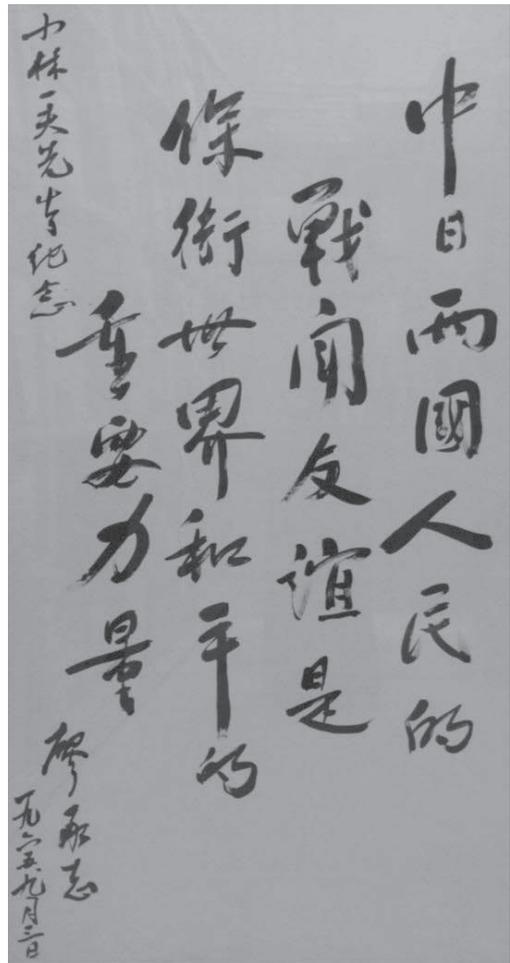
近衛文麿東亜同文会会長による東亜同文書院大学呉羽分校開校の式辞[No.70-1]は、呉羽分校で講師を務め、戦後は愛知大学教授を務めた**池上貞一氏**の寄贈によるものである。東亜同文書院第46期生(1945年入学)は戦況の悪化で日本から上海に渡ることができなかつたため、富山県婦負郡呉羽村(現富山市)にあった呉羽航空機工場(旧呉羽紡績)を利用して1945年7月に開学した呉羽分校で学ぶことを余儀なくされた。

しかし戦時下であったため、工場での勤労働員に従事しながら授業が行われるという状況であった(7)。

近衛会長の式辞には「戦局ノ推移ハ愈々急迫ヲ告ゲ」、「焉ンゾ恒例ヲ追ウテ入学直後現地ニ渡航正規ノ課程ヲ履修セシムルノ余地アラシヤ」などの文言が記されており、戦況が非常に逼迫した状況下での開校であった様子が伝わってくる。

なお、呉羽分校は敗戦翌日の8月16日に休校したが、東亜同文会は分校再開の申請を、同会を管轄する外務省の吉田茂外相に申請し認可を受けた。これにより10月15日に開校することになったのであるが、東亜同文会の先行きの見通しが立たず、外務省の指導方針も不明であること、そして経営財源の確保の見込みがないことなどもあり、わずか1ヵ月後の11月15日に授業は打ち切られた(8)。したがって呉羽分校の歴史はきわめて短い、そうした点を踏まえると、この式辞は戦争末期の分校を取り巻く状況を今に伝える貴重な資料である。

小林一夫氏から寄贈された廖承志書 [No.71-1] は、日中国交回復前の1965年に廖承志中日友好協会会長から、NHK初代北京支局長を務めた小林氏に贈られたものである。小林氏は東亜同文書院大学第44期専門部を経て1950年に愛知大学を卒業し(旧制法経学部法政科3期卒)、NHKに入社。日中間で記者交換が実現したことにより、1964年9月に両国の記者がそれぞれ着任したが、小林氏は日本から中国へ渡った5名の記者の一人だった。寄贈された廖承志書は、1年間の任期を終えて日本へ帰国する5名の記者に対し、廖自ら記念に揮毫したものの一つである。日中国交回復以前



廖承志書 [No.71-1]

の日中交流を示す重要な資料と位置付けられる。小林氏の記憶では、書の文言はそれぞれ異なっていたようであるが、そうであるならば他の4名の書には何が記されていたのかについて関心がそそられる。

なお、小林氏は日本へ帰国後、NHKアジア総局長や国際局次長などを務めて解説委員となり、1977年から10年余りにわたって中国問題を担当した(9)。

台北における東亜同文書院大学同窓会写真 [No.72-1] は、簡崑田氏から寄贈されたものである。簡崑田氏は台湾出身で東亜同文書院に第35期生として入学、卒業後は三

井物産上海支店で勤務し、戦後は台湾で実業界に身を置いた人物である(10)。

写真上部には「1951.11.28」と日付けが入っているが、これは日本と台湾が 1952年に国交を樹立した「日華平和条約」の前年に当たる。判明分の限り、東亜同文書院第20期中田豊千代、第28期堀川静、第32期柴田浩嗣、第34期山田忠、第41期吉田長雄の4名の日本人とともに、7名の中国人、16名の台湾人が写っている。



台北における東亜同文書院大学同窓会写真 [No.72-1]

中田豊千代、堀川静、吉田長雄は外交官であり、特に中田は1951年10月に外務省事務官として在台北日本政府在外事務所在勤を命ぜられ、その後1952年2月には日本と在台湾中華民国政府との条約交渉締結のための全権委員随員の一人として選ばれている(11)。したがって、写真は台北に赴任してきた直後の中田を歓迎して開催された同窓会と思われる。この時の堀川、吉田と台湾との具体的な関わりは詳細不明だが、彼らは後に在台北日本大使館で勤務している(12)。また、孫文支援者だった山田純三郎の長男で当時兼松に勤務していた山田忠

や、自営業を営んでいた柴田浩嗣の姿もある(13)。日本人の海外渡航がまだ容易でなかった時代にこの両名がどのように渡航してきたのか、興味深いものがある。

なお、中国人は東亜同文書院(大学)で教員を務めた人物や、東亜同文書院が中国人教育のために1920年から1934年まで開設した中華学生部で学んだ人々である。彼らは第二次大戦後の中国大陆における国共内戦などの混乱を避けて、台湾へ移住してきたと思われる。

日・台・中のそれぞれ出身が異なる教員や同窓生が戦後間もない時期に集まった様子を撮影したこの写真は、彼らの絆が如何に深かったかを示している。そしてそれは、彼らの絆や人脈が戦後間もない時期であっても国境を越えて築かれていたことも示している。そ

のような意味で、この資料は大変重要なものである。

今回寄贈頂いた方々、そして以前寄贈頂いた方々に厚くお礼申し上げます。

注：

- (1)吉田初三郎の経歴および彼の作品については堀田典裕『吉田初三郎の鳥瞰図を読む』(河出書房出版社、2009年)。また、『別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図』(平凡社、2002年)にも吉田が制作した多くの作品が収録されている。
- (2)長崎丸と上海丸、および他船の救援活動

状況、日華連絡線の運休と復旧の様子は『日本郵船株式会社五十年史』319頁、320～323頁、327頁（日本郵船株式会社、1935年）。

(3)『七十年史』149頁、264頁、265頁、266頁（日本郵船株式会社、1956年）。

(4)岡林隆敏編著『上海航路の時代』20頁（長崎文献社、2006年）。

(5)第25期～27期、第33期～第36期、第42～43期は東亜同文会『事業報告書』（ただし第25期はアジア歴史資料センター、Ref.B05015245300）、第28期は『支那』第19巻5号、115頁（東亜同文会、1928年）、第31期は「一般(47)新入生招見式 自昭和四年至昭和七年」（アジア歴史資料センター、Ref.B05015338400）。

(6)藤本尚則『国師杉浦重剛先生』408頁（敬愛会、1954年）。書の書き下し文も同書407～408頁に拠った。なお「改造」の風潮については、例えば『大正社会と改造の潮流』（吉川弘文館、2004年）の編者である季武嘉也氏が同書で設定する「改造」の定義について、1921年に編纂された本をもとに、「「デモクラシー」をも含んだ「世界的基調」を踏まえた上で、日本国家と日本国民の实情に即した形での体制の変革を志向した思想・運動である」と述べている（季武嘉也「大正社会と改造の潮流」15頁、同書所収）。

(7)井上方弘「呉羽物語」、池上貞一「東亜同文書院大学呉羽分校顛末」添付資料（『同文書院記念報』Vol.16、34頁、愛知大学東亜同文書院大学記念センター編集発行、2008年）。

(8)「附記（10）呉羽分校開廢の経緯」、前掲「東亜同文書院大学呉羽分校顛末」添付資料（前掲『同文書院記念報』Vol.16、39～40頁）。

(9)小林一夫氏の経歴については『東亜同文書院大学史』647頁（滬友会、1982年）、東亜同文書院大学と愛知大学』4頁（六甲出版、1993年）。日中間の記者交換による中国着任と廖承志書をめぐる回想・エピソードについては『愛大通信』133号（1999年7月23日）。

(10)前掲『東亜同文書院大学史』303頁、585頁。

(11)「外務事務官木村四郎七外4名中華民国政府と戦争状態を終結し正常関係を再開するための条約を交渉締結する全権委員随員を命ずるの件（外務省）」（アジア歴史資料センター、Ref.A17112441600）。

(12)前掲『東亜同文書院大学史』286頁、287頁。

(13)山田忠、柴田浩嗣については『昭和二十六年度滬友会会員名簿』、『滬友名簿（1953年度版）』、および前掲『東亜同文書院大学史』563頁、576頁。

【凡例】

- (1)登録番号は通し番号として登録している。
- (2)歴史的な人物と位置付けられる人名については、敬称略となっている。
- (3)漢字は全て常用漢字とした。
- (4)目録中の「寄贈年月日」は資料が記念センターに寄贈された日、もしくは到着した日を示しているが、年しか記していない箇所もある。また、—は具体的な年月日が不詳であることを示す。

2017年寄贈資料目録

No.	日付	内容	差出人	受取人	寄贈者氏名	寄贈年月日
36 36-117	1924年9月15日	関東大震災全地域鳥瞰図絵			有森茂生氏	2016年11月27日
69 69-1	1922年	杉浦重剛書幅			三好章氏	2017年

追加登録

70 70-1	1945年7月20日	近衛文麿東亜同文会会長による東亜同文書院大学呉羽分校開校の式辞			池上貞一氏	1998年11月13日
71 71-1	1965年9月3日	廖承志書	廖承志	小林一夫	小林一夫氏	1999年
72 72-1	1951年11月28日	台北における東亜同文書院大学同窓会写真			簡崑田氏	—